

現代日本語における「つもりだ」の意味再考

阿久澤弘陽

名詞述語文「XはPつもりだ」には、大きく分けて〈意志〉、〈思い込み〉、〈仮想〉の用法があるとされる。その意味や機能はかなりの程度明らかにされてきたと言えるが、容認可能な用例に基づく記述がほとんどであり、各用法が生まれる環境や「つもりだ」自体の意味記述には未だ検討の余地がある。

本研究では、〈意志〉と〈思い込み〉を表す「つもりだ」を「主節タイプ」、〈仮想〉を表す「つもりだ」を「従属節タイプ」と分け、新たな事実観察から「つもりだ」に見られる二種類の意味と用法間の共通点を明らかにする。具体的にはまず、埋込節動詞の意味や時制形態から説明されてきた〈意志〉や〈思い込み〉が生まれる環境を、埋込節事態Pのあり方から捉え直す。その上で、単に「XのPに対する思考を表す」とされることの多かった主節タイプの「つもりだ」の意味に、Xの意図的行為とPの間の因果関係（責任関係：Farkas, Donka (1988) On obligatory control. *Linguistics and Philosophy*, 11(1))が含まれていると論じ、その意味は「前提:XはPをX自身の意図的行為によって引き起こすことができると思っている/主張:XはPだと思っている」と記述できると主張する。また、一見Xの意図的行為が関係ないように思われる従属節タイプの「つもりだ」にも、Xの意図的行為が関与していることを示し、その意味を「前提:XはPがX自身の意図的行為Qを行う上での仮定的状況だと思っている/主張:XはPだと思っている」と記述する。こうした意味記述によって、言語事実をより正確に捉えられるようになるのと同時に、いずれの用法においても「Xの意図的行為」が背後にあるという共通点が捉えられるようになる。

「つもりだ」の意味を明示的に示すことにより、複雑な様相を呈する「意志性」の一端を明らかにできることが期待されるだけでなく、生成文法理論における特定の現象を意味的な観点から再分析することも可能となる。